

二月一日

人に逢うて何かなつかしく、いつまでもその人と話したいと思える人と、そうでない人とがある。

眼の光のなごやかな人と、鋭い人と、温かい人と、冷たい人と。なんとなく凄い人と、狡^{ずる}そうに見える人と、人間にもいろいろあるものだ。

ひらいた心の人でないと明るい眼の人にはなれるものではない。幼児の眼が澄んで清らかなのは、幼児の心は打ち開いた澄んだ天空^{かい}海^{かい}の心をしているからである。幼児でも虐^{しいた}げられている継^ま児^{まこ}は清らかな眼はしていない。

濁りに染まない幼児の眼のような心になりたいものだ。

いろいろの眼の光のあるうちで、一番わたしの好きでない眼は狡^{ずる}い光の眼である。愛の光のある眼は温かく、知恵の深い眼は時として冷たい。時として冷酷にさえ感じられる。冷たい眼でも、その冷たさが知恵の深いために冷たい光を湛^たえているのは崇高にさえ感じられる。

隠し心のある眼、正面を真正面^{まとも}に見られない眼、下を向いていて上眼づかいで見る眼、顔の向かぬ方を盗み視する眼——およそ狡^{ずる}い眼の光はこういう眼の種類である。

ぱっちり打ち開いた愛くるしい隠しのない眼の光で相手を見る人は必ず好運である。

形は心の影である。眼の形、眼の光、そのとおりの形のも

のがあなたの運命をあらわしている。

どんよりと曇っている眼の人は、心も曇っている。眼の三角の人は心も三角である。

二月十六日

常に新しくなるものは老いない。老いるとは常に新しくなれないことの別名である。人体の細胞を切り離して培養^{ばいよう}し、その培養基^{ばいようき}を常に新しく取り替えれば、結局人間の細胞は永遠に分裂増殖して死なないものであることが生物学上の実験によって確かめられたという。人間の肉体が老いて衰え死するということは、細胞が複雑に組み合っているために、常に新しくなれないからであって、必ずしも人間が老衰死するということが運命ではないのである。ただ老衰死の原因は常にわれらが新しくなれないということが原因である。

人間の心もそのとおりである、常に毎日新しくなれないものは死につつあるものである。陳^{ちん}び^びつつあるものである。

老人が陳腐^{ちんぷ}であるといつて人から嫌われるのは、ただ過去の情力^{ぢりよく}で生きており、過去の情力^{ぢりよく}でものを考え、過去の情力^{ぢりよく}で行為をし、過去の情力^{ぢりよく}で若い人を推し測るからである。

過去の情力で行為されたものは、すでに形骸^{けいがい}であって生命はない。これを称して型にはまるといふのである。型にはまっているものは形は立派に見えても、もう屍^{しかばね}である。

三月八日

自己弁護をする者は、まだ本当に真理を求めているものではない。「本当の自己」は常に昭^{しょう}々^{じやう}として輝いており、弁護

してかろうじてその尊嚴そんげんの保たれるようなさもしい存在ではない。弁護しなければならぬような自己は、ただその「弁護しなければ尊嚴が保てぬ」という理由だけで「本物の自己でない」ことを証明している。

四月二十六日

本当の幸福は淡々たる水のごときものである。淡々たる水のごとき幸福によつてのみ魂は本当の渴かつを癒いされるのである。どぎつい幸福、有頂天な歡喜かんき、陶酔的な快味かいみは、アイスクリームのごとく、コーヒールのごとく、砂糖入りの紅茶のごとく、酒のごとく、アルコールのごとく、刺激が強いかわりにいつまでも渴かわきは続くのである。

淡々たる生活の本当の幸福の味を知るようになるまで、人間は彷徨さまよい歩かねばならないであらう。

五月一日

お山の杜鵑花つつじが真盛まさかりである。万物がわたしのために讃歌を歌っている。讃歌の世界、花葩はなびらの降りそぐ世界、この世界がそんな美しい世界だと知ったときわたしはこのお山へ招かれて来たのである。

「三界がいは唯心ゆいしんの所現しよげんであるご釈迦のこの哲学が真実であるならば、心の法則を知ることが三界を自由に動かし、運命を自由に支配することとならざるをえないのである。

「なんじの信ずるがごとくになんじにまでなれ」キリストのこの信仰が真実であるならば、信念の法則を知ることが環境を自由に支配し、肉体を思うまま健康にし、心に思うまま

法悦かんきと歡喜と平和を満たすところの唯一の鍵であるといわなければならない。

心の法則なるかな。信念の法則なるかな。

せっかく、光明こうみょう真理に触れたのであるから、もう一度この問題を復習してみることは、これからの自分の生活を確固かくことした基礎の上に置くことになるのである。

五月二十八日

われわれの魂の底なる希望を実現する祈りを、紙に書いて神に訴うたえるようにする時、その祈りの実現性がいつそう多くなるということはグレン・クラーク教授の著書ちよしよの中にも書かれている事実である。生長の家せいちょうのけの信徒の中にも欲する事物を紙に書いて壁間へきかんに掲げ置き、常にそれを眺めて、そのすでに成就せる有様を心に描いて感謝する氣持を起こしているとき、その希望が成就じょうじゆせる実例はすいぶんたくさんあるのである。ある婦人は一大難関に出会でくわして、人間力ではどうしてよいかわからない時、突如とつじよとして神に頼もうという感じが湧き起こり、神に対して手紙を書きはじめたのである。「神よ、あなたは無限智みんちであります。無限愛であります。無限力量りきりようであります。あなたは無限の愛をもってわたしを導いて下さいます。あなたは無限の智慧をもってわたしがこの難関なんかんを切り抜ける道を教えて下さいます……」それから具体的な問題をこまごまとその神様に送る手紙の中に書きはじめたのである。すると、自分一人でどうしようかと思いまどう心の騒ぎがしだいに落ちついてきて、神とともに、その事件について対処する道を考えているような安らかな氣持になつてきたのである。

そのうちに事件の全貌^{ぜんぼう}がハッキリしてきた。何が問題の重要な部分であるか、何が問題とするに足りない部分であるかがハッキリしてきたのである。その神への手紙を書いているうちにはまだ完全にその問題は解決せず、解決の緒^{いとぐち}が見えていただけであったが、その三日後にはすべてのことが順潮^{じゅんちょう}に進行して万事解決したのである。病気の時に神にこれに類する手紙を書いて、急に病気が快方に向かった実例があるのである。

神に手紙を書くことによるこれらの功德^{くどく}が起こる原因は、それを書いていっているうちに、心が完全に神に向かうことになるからである。そして「吾れ神と偕^{とも}に在り」という自覚が起こつてき、そのために心の平和が回復し、神の叡智に波長が合うようになってき、したがっていっさいの問題が順潮に解決するようになるのである。

ただ、祈っているだけでもむろん効果があるのであるが、十五分以上も雑念なしに完全に神に心を振り向けて祈ることとはやや困難な人が多いのである。しかし手紙を書くとなれば、三十分はおろか一時間以上も神に対して心を集中することができる。そのために神との一体感がいっそう起こりやすく、効果もそれに従って多いのである。

六月二十三日

朝目を覚ましたとき、その疲労感に捉われるな。多くの病^{はんすい}は、半睡半覚状態における身体のだるい感じを「病気の執拗^{しつこ}いたためである」と錯覚^{さつかく}しているのである。「身体のだるいのは同じ姿勢で長く寝ていたからである」と信ぜよ。そして「今

後自分には善きことばかりが来るのである。自分は神の子であり、神に祝福されたものであるから、常にいっそう幸運は訪れ、常にいっそう健康になるのである」と瞑目^{めいもく}のまま低声^{こしえ}をもって繰り返し念ぜよ。必ずその言葉の力のおりになるのである。

生命の實相 日本教分社 谷口雅春